

# 日本災害情報学会「廣井賞」

(廣井賞表彰審査委員幹事 天野 篤)

■ 2011 年廣井賞授賞式・受賞記念講演：2011 年 10 月 29 日 名古屋大学

## 1. 2011 年廣井賞

### ■学術的功績分野 (個人)

群馬大学広域首都圏防災研究センター センター長  
大学院工学研究科社会環境デザイン工学専攻 教授  
片田敏孝氏

自然災害に関する長年の研究に基づき、各地の現場で避難をすすめる独創的かつ実践的な防災教育に携わってこられた。東日本大震災の際、釜石市では子どもたちが率先して津波から避難し、無事逃れることができたが、これはその防災教育の成果であり、災害情報分野における顕著な功績であると認められる。

※ 社会的功績分野は該当なし

## 2. 授賞式

### 2.1 河田恵昭会長

学会発足から 6 年間会長を務められた廣井脩先生の業績を記念し、廣井賞を設けました。東日本大震災以来、たいへん忙しい時間を過ごしていますが、しばしば「彼が生きていればどんなことをしてくれただろうな」という思いにかられます。志半ばで亡くなりましたが、これからの日本を背負っていく受賞者に彼のメッセージを伝えたい。多くの学会員に廣井賞を目指して社会に役立つ仕事や研究をしていただきたい。その励みになることで学会が少しでも社会貢献できればと思っています。



### 2.2 藤吉洋一郎委員長

今年はこの人をおいてないと、迷うことなく決まりました。震災後、自分たちがやってきたのはいったい何だったのだろうかという思いに苛まれました。そんな中、釜石では子供たちが自らの力で無事避難していたという話が届きました。それは、片田先生が何年も現地に通り、地元の皆さんと一緒に防災に取り組み、そういう子供たちが育っていたということでした。各地のみなさんとどうやったら無事に避難できるかを現場で考えてこられた実践のひとつが実を結んだと感じています。



## 3. 受賞記念講演 「想定外を生き抜く力を育む防災教育 ～岩手県釜石市の防災教育に携わって～」

防災研究に着手したばかりのころ、廣井先生からある日突然電話がかかってきて、郡山のハザードマップの研究を褒めていただきました。廣井



先生というと、駆け出しの防災研究者にとっては雲の上のような人だったものですから、わざわざ電話をいただいたということだけで感激だったのですけれども、応援の言葉までいただいて、非常に頑張ろうという思いになったことを、今でも思い出します。

今日は私が学会賞をいただきましたが、釜石の 14 の学校、約 3,000 人の子どもたちにちゃんと向き合っただけで教育していただいたのは学校の先生方です。そういった面で釜石の取り組みそのものに対して賞をいただいたというふうに理解しています。また長い間、研究室のスタッフもかかわってまして、みんなでもらったと思っています。

さて、釜石での学校防災教育に 7 年余かかわってきました。とにかく実効性のある防災をやらなければいけない。今の社会、避難勧告を出しても親が逃げない、誰も逃げない。その環境で子どもたちは育つ。津波常襲地域で、次が必ずある中でその時を迎えるとどうなるか。そういう思いの中で、子どもたちがちゃんと逃げられる教育とはどういうものかを模索しながらやってきました。

先生方には、防災教育は知識を与える教育ではないということ。知識ならば、例えば耐震補強、家具の固定、みんな分かっているにもかかわらずやっていない。こういったところをどう変えていくか、人を変えることが防災教育だと。沿岸部の人たちは津波が危ないのは知っている。常襲地域にあることも知っている。でも逃げない。知識を与えること以上に必要なのは、姿勢を与えることだと分かってもらうよう、テキストの開発に 2 年を費やしました。授業の中で防災教育という時間を取ることができず、例えば算数の問題で「津波が陸上では秒速 5m です。海岸から 200m 離れた A 君の家まで津波は何秒で来ますか」と、あえて津波の問題に置き換えていろいろな科目でやりながら、避難訓練も繰り返しながら、子どもたちが今回の姿勢を身に付けてくれました。本当に釜石の子どもたちを褒めてやりたいと思っています。

根本的に必要なのは、文化の醸成です。これだけ繰り返して被害を被っているところですから、文化として残っていないとおかしい。被災地は今でこそ語り継いでいかなければという思いですが、いつしか忘却のプロセスとなる。人間ですから嫌なことは忘れたい。語られることもなくなっていく、教訓は何も生かされない。釜石のようなところでは「揺れたら逃げるのが当たり前ではないか、どうして逃げない」と逆に聞くぐらいに常識化すること。風化というのは「徳によって教化すること」。語らなくなるのだけれども、忘却ではなく常識と化して、つまり文化となっているから語らない。こういう状態に

なっていなければいけないというのが僕の持論です。

最初はあちこちで防災講演を繰り返しました。はたと気付けばいつも来ている人は同じ。「先生、今回もええ話やった」と「も」なのです。これは駄目だ。防災講演に昼間から土日をつぶして来る人というのは、初めから防災意識や関心が高いに決まっている。どうやってそれ以外の人にコミュニケーションしていくかが重要な課題です。そんな中で、子どもたちの防災教育を10年やって、彼らを大人にして、もう10年して彼らを親にする。そしてまっとうな親の下で次の世代が育つ。これで文化のメカニズムができる、そういうふうを考えてやってきました。

釜石の防災教育で何を教えたかったのか。相手は自然です。時にとつともない現象を起こすと分かっているのに、なぜかあまり反応しない。日本の防災が中途半端に高いレベル、治水ならば100年確率、100年に1回、つまり一生に一度あるやなしやのレベルで、先進国たるものやりましょうと。ところが生活者の感覚からは100年という数字が魔物で「ひいじいちゃんの代にあつたらしいよ」みたいな話になる。それは「ない」ということです。いつしか自然を封じ込めることが可能だといわんばかりの驕りが出てくる。そして、高いレベルの安全を確保してくれるのは行政だ、ひとつよろしくと。そんな状況で自らの命を守ることに對して主体性などあるわけがない。つまり、高さ10mの防波堤が二重にある田老も、水深63mから立ち上がる湾口防波堤ができた釜石も、それによって逃げなかった人たちがいる。土木屋はハードを造って守ろうとしてきた。確かに守った部分もたくさんある。でも、それによって死なせた命もたくさんある。災害大国であると同時に、防災大国日本であるからこそ起こる問題と僕は考えています。その中で、子どもたちに防災教育をやるのです。小学1年生の子どもに向かって「大いなる自然の営みに畏敬の念」、「はあ？」となります。「自分の命を守ることに主体的たれ」、これも分かるはずがない。これをどうしていくかということで、子どもたちには避難の三原則を咀嚼して伝えていきました。

今回の津波は想定外と言われます。本当に想定外か。どうも「想定外だから仕方なかった…」みたいなことがあるように思えてなりません。「想定」とは何か。相手は自然です。何だってありと考えると、今回の事象は想定のうちです。でも巨大な災害を防災という現実の世界に持ち込んでくると、途端に「対処しようなし」という結論しかないわけです。それでは意味がありませんから、勢い防御の目標を置いてその範囲で守ろうとする。津波は低頻度大規模災害なので、雨と違って確率は定義できません。過去最大のものということが多く、明治三陸、昭和三陸津波だということになります。翻って今回、どこで人が死んだかを調べました。ハザードマップを境界にして外側で人が死んでいます。内側はほとんどの人が逃げています。ハザードマップは何のために作ったのか。白地の人たちを死なせるつもりだったのかと言いたくな

る状況がここにあります。どうしてこんなことが起こるのか。それは防災の情報は、自分の身にかかる災いの情報ですから、あえてそれ以上の悲惨な状況を考える動機が起きない。「よかった」と思う心情がそのまま死に直結してしまうわけです。

そんな想定にとらわれすぎている子どもたちに、三原則の中で一番最初に言ったのは、ハザードマップを信じるな、想定にとられるな、です。具体的には、津波ハザードマップを子どもたちに見せます。「おれんちセーフ、おまえんちアウト」と子どもたちは大騒ぎです。しばらく聞き流して話しかけます。「なあ、君んちって本当にセーフなのか」。「だって色ついてない」と答えます。「でもこの色ってさ、明治三陸津波がもう一回来たらということに付けているんだ。この次の津波って明治三陸津波か。それよりも大きいかもしれない、小さいかもしれないだろ」。「そうか」と子どもたちはここで理解するのです。固定観念にとられる大人は駄目なのですが、子どもはちゃんと理解する。その証拠に、次の一言が出てきました。「先生、

学校だって危ないかもしれないね、川の近くだし、ハザードマップのすぐ近くだし」と言ったのです。そのとき、ああこいつら分かったなと思いました。

次に教えたことは、相手は自然だからいかようなこともあり得る。だからいかなる状況下においても最善を尽くせと。その日、釜石東中学校で最初に逃げたのはサッカー部員です。練習していたら地震があって、地割れが走ったというのです。子どもたちは校舎に向かって「津波が来るぞ、逃げるぞ」と言って、鶴住居小学校に行ったのです。そして小学校に向かって「津波がくるぞ、逃げるぞ」と声を掛けて、ございしょの里へ逃げていく。中学生もそれにつられて逃げていくのですが、小学校は耐震補強が終わったばかりで、鉄筋コンクリート3階建です。雪も降っている。ハザードマップの外側。避難所になりそうな建物です。子どもたちは、日ごろ一緒に避難訓練していて顔見知りの中学校のお兄ちゃんたちが一生懸命走っているの、先生が上階に引率している後ろの方から、中学生の列に加わっていく。結局そろって600人の子どもたちがございしょの里に向かって逃げました。近所のおじいちゃん、おばあちゃんもたくさん入ってきました。鶴住居保育園は、初めはハザードマップからかなり距離があり、逃げようと思っていなかったのですが、中学生たちが懸命に走っているものから、0歳児を慌てておんぶして、1、2歳児は乳母車の大きい5人も6人も乗るものに乗せて、別の所を上がってきたのです。すると中学生数人がダァッと走り寄って、一人一人引きぬいて抱っこして、ございしょの里に逃げこんでいきました。津波は最終的にそこまで来たのですが、子どもたちが逃げ込んだ時にはまだ大丈夫でした。小中学生、保育園児、おじいちゃん、おばあちゃんがいる中、子どもが、崖が崩れかけているのを見つけ「ここじゃ駄目だ」と言い始めました。子どもたちはみんなで山崎デイサービスセンターへ向かって走り始めます。もうパニックになっているのですが、みんな一人ずつ中学生が手をつないであげています。大丈夫だからと励ましているのです。そしてこの後ろにはさらに保育園の子どもたちを抱きかかえた女の子たちが並び、その後ろには、ございしょの里の入居者の車いすを押している中学生が並んでいる。みんなで山崎デイサービスセンターに向かったのです。子どもたち全員がそこに入ったわずか30秒後、ダァッと津波が来て、がれきがギーギー音を立てながら裏で渦を巻いたと言います。わずか30秒のことです。本当にできる限りのベストをやり抜いてくれました。もし子どもたちがハザードマップを信じていたら小中学校に居ていいはず。子どもたちが留まっていたら何が起きていたか。津波の後に行ってみると、校舎の3階に軽自動車が刺さっていました。間違いなく600人の子どもたちは死んでいました。ほんのわずかな時間差で助かってくれました。子どもたちに教えてきた災害に対する姿勢は、間違っていないかと思えます。

そして、姿勢だけでは人間は逃げられないということで、さらに子どもたちには「率先避難者たれ」と言いました。非常ベルの例を引き合いに、人間って逃げない、正常化の偏見というものがあるからだとこの話をしたのです。子どもたちは「先生は周りの人たちを助けろって言ったじゃない、なのに真っ先に逃げるなんて変じゃないか」と抵抗しました。「ばかだなあ、自分の命がなかったら人の命も助けられない。君らが真っ先に逃げればみんな従うから、率先避難者は、実質、君の命だけではなく、多くの人の命を守ることになるんだ」。そして「君らは自然に思いっきり近づいて海の恵みをたくさんもらっている。でも、自然に近づくということは、ほんの時たまだけでも、自然の大きな振る舞いに付き合わざるを得ない。しかし、それを恐れる必要はない。その日その時だけでいい、ちゃんとした対応ができる自分であれ。そういう姿勢を身に付けること。それは釜石に住むお作法だ」と続けました。

間違った防災教育の典型は「脅し」。よくある恐怖喚起のコミュニケーションで

【率先避難者たれ】

- …正常化の偏見を打ち破る
- …同調性バイアスでみんなを巻き込む

※正常化の偏見「自分は大丈夫」

- 自分にとって都合の良い情報を無視したり、過小評価してしまう人間の特性
- 例)逃げない非常ベル… 初着のリスク情報の無視

「助けられる人」から「助ける人」へ

安否札と防災マップを作成し、地域の高齢者宅に配布

全て生徒たちの手書き  
（名、あづま）

高齢者宅を生徒が訪問し、安否札の使い方や避難方法を説明

ぼうさい甲子園優秀賞を受賞  
（2009年度・2010年度の2年連続）

釜石東中学校

釜石に住むためのお作法としての津波防災

自然の恵みを受容する＝自然の災いに近づく

災いをやり過ごす知恵（津波避難者を持つことは、豊かな自然の中で生活するための条件）

釜石の子どもたちに教えてきたこと

- 姿勢の防災教育  
防災に対し主体的な「姿勢」を醸成する
- ✕ 脅しの防災教育  
恐怖喚起のコミュニケーション  
無任前に実施される広報活動は効果がない
- ✕ 知識の防災教育  
与えられる知識は主体的な姿勢を醸成しない。  
災害イメージの固定化をまねく… 想定にとらわれる

す。人間は怖いことを気にしても長続きしません。そんな教育をしていたら子どもたちは釜石が嫌いになるだけです。また、学校の先生方が間違えやすいのは「知識」の防災教育。知識さえ持っていれば合理的な行動が取れるという誤解です。災害に関わる情報や知識というのは、必ずや上限値を規定したり、イメージを固定してしまう。想定にとらわれることそのものです。とかく敵を知りたいのですが、敵以上に知らなければならぬのが己。敵に打ち勝つのではなく、自分自身に打ち勝つことの方が、防災には大事だと思います。そういうことをこの地域の子どもたちに教えてきました。

そして最後の授業。「先生は君たちが絶対逃げると分かっている。でも逃げた後、君らのお母さんはどうすると思う」と言うと、子どもたちの顔が一斉に曇ります。お母さんは僕のことが大事だから迎えに来る。その結果…、ということが子どもたちにも分かる。もう不安な顔をしています。酷なことを言ったと思います。でも「いいか、今日家に帰ったら、僕は絶対に逃げるとお母さんに言う。お母さんが信じてくれなかったら迎えに来るぞ。信じてくれるまでお母さんに言うこと」と言い渡します。そして、お母さん方に「今日は子どもたちと正面向かってちゃんと話しあってください。お母さんの命を心配して、『僕はちゃんと逃げる』と信じてくれなければ、お母さん来ちゃうと思って一生懸命言います。そして子どもが絶対逃げるという確信を持ったとき『分かった。ちゃんと逃げるんだよ』ということと、『じゃあお母さんも逃げる』と言ってやってほしい。そして最後に『後で必ず迎えに行くからね』という一言を添えてやってほしい」と。これが「津波てんでんこ」だと思のです。この言葉は、どう聞いても表面的には薄情な言葉です。でも、家族の絆が一家全滅を導くとか、被害を大きくするという歴史の中で苦渋に満ちた先人の言葉が「津波てんでんこ」です。一人一人の命を一人一人が守る。それが可能な家庭をつくるということ。つまりは、一人一人が自分の命に責任を持つということに加えて、それを家族がお互い信頼しあえる、これが「津波てんでんこ」です。今、釜石に行くと、お父さんやお母さんにたくさん声を掛けられます。お母さんに「逃げました？」と聞き返しますと「逃げましたよ、うちの子なんかね、逃げるなって言ったって逃げますから」。「てんでんこ」というのがそれだけ行き渡ったということだろうと思います。釜石は3,000人の小中学生の親の中で、三十数名が亡くなりました。全体で1,100人亡くなっているうちの三十数名です。多くは消防団とか職責全うの中で亡くなっています。ですから「てんでんこ」はすごく生きたいと思います。

地域に広める努力もいろいろやりました。津波こども避難の家、お年寄りを助けるためのリヤカーを引く訓練、消火訓練、応急処置や救急の訓練、防災マップづくり、炊き出し、防災頭巾づくり、てんでんこレンジャー、安否札などなど。地域みんなで助かろうという動きをやってきていたの

が、釜石の子どもたちなのです。

子どもは環境で育ちます。そして今、我々は子どもにちゃんと逃げる環境を与えていません。このままでいったら子どもたちはまっとうに逃げません。僕らの責任です。そんな中で、これだけの経験をしました。次、必ず惨劇が来るとき、3.11の経験をしたが

故に、先人はこんなことをしていたが故に、津波でいたずらに人が死なずに済んだ、それまではどうもたくさん死んでいたらしいぞ、という時代が来ることを、そんな時代をつくっていくことが我々の仕事なのだと思います。

最後に防災研究者の受賞ですので、もう一言だけ言わせてください。阪神淡路大震災以降、日本の防災は本当に良くなっています。日本の防災は劇的に変わりました。今回の被災地に行ってみてください。あれだけの支援金が集まり、あれだけのボランティアが集まり、行政もみんな行って、みんなで精いっぱい支援しています。被災した生活再建の支援、ボランティア管理もそうです。でも僕は、それであっても、阪神淡路大震災以降の日本の防災は、どこかしら間違っているところがあったと思っています。最も重要なのは、災害の時に人が死なないことです。今回2万人近くの人が亡くなっています。一番悔しい思いをしているのは、亡くなった方々のはずです。その無念の塊であるところのご遺体は、僕らの眼に触れることなく、自衛隊や消防の方々がこっそり片付けてくれます。そして、僕らが現地に入ると、生き残って今を苦しんでいる方々がたくさんいます。そして、人間として当然のこととして、精いっぱいの援助、支援をします。これはみんな生き残った人たちが対象です。そしていつしか弔いの心を満たしてしまいます。僕は、防災のファーストプライオリティは、災害の時に人が死なないことだと思っています。セカンドプライオリティは、生き残った人たちをどう立ち上げ、どう支援していくかということだろうと考えています。そういう面では、今僕らはあらためて、人が死なない防災というところに力を注ぐべきなのではないかと思っています。

以上で話を終わらせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

## ※ 2012年廣井賞

2012年廣井賞候補の推薦を募っています。詳しくは、[http://www.jasdis.gr.jp/16hiro\\_i\\_prize/index.html](http://www.jasdis.gr.jp/16hiro_i_prize/index.html)にて。

